別紙　１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　　川端　香

論　文　題　目

（英文論文の場合は、（ ）書きの和訳を付すこと。また、英字の大文字、小文字も論文題目と合わせること）

半側空間無視患者の障害の自己認識について
～意味のある作業を用いた介入～

論文審査担当者

主　査　名古屋大学教授　　千島　亮
　　名古屋大学教授　　辛島 千恵子
　　名古屋大学教授　　寶珠山 稔

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

本研究では、意味のある作業に基づいて構成した視空間探索課題が、半側空間無視（USN）患者の障害の自己認識と無視症状に及ぼす影響について検討した。

脳血管障害および頭部外傷後に後遺症としてUSNの残存した慢性期の患者のうち、機能訓練として従来の視空間探索課題を行っているものの更なる改善が認められない6名を対象とした（平均年齢：54.3歳（42～69歳）、発症からの平均日数は280.7日（220～435日））。それぞれの患者には面接により決定した患者にとって「意味のある作業」を含みつつ、USN 症状への介入となる視空間探索課題を設定した。介入期間は、1回60分、週2回、3週間とした。評価項目として、介入前後にBehavioral Inattention Test（BIT）、Trail Making Test-A, B（TMT-A, B）およびCatherine Bergego Scale（CBS）のいずれも日本語版を実施し、USN症状の変化を評価した。自己認識の評価にはAwareness Score（AWS）を用い、対象者本人によるCBSと作業療法士による患者のCBS点数の差をAWSとした。また、対象者の変化の内容を記述的観察した。

意味のある作業を取り入れた視空間探索課題実施前後でAWSが有意に改善した（$P<0.05$, FDR（多重比較））。他の個別の評価項目には有意差は得られなかったが、全対象者が一つ以上の評価項目で改善が見られた。介入後には、介入前には見られなかったUSN症状に関する対象者の気付きが得られたとする、本人や家族の記述がみられた。

本研究における「意味のある作業」を用いた介入の主たる効果は、障害に対する自己認識の改善であった。障害を認識することはUSNに対する代償行動の獲得に重要な役割を果たすと考えた。本研究は、意味のある作業を行うことを機能回復の手法や目標として設定することで、より効果的な介入とする可能性を示した。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 患者それぞれの「意味のある作業」を設定し介入に取り入れることで機能障害への自己認識が賦活されたこと
2. 「意味のある作業」は、作業への動機づけに有用であり作業的意味を高める方向に働くこと
3. 目的達成への意欲と障害の自己認識の改善は、リハビリテーション介入全般において回復を促す重要な要素であり、オーダーメードリハビリテーションとして「意味のある作業」を組み入れる効果を示した研究として意義がある

以上の理由により、本研究は博士（リハビリテーション療法学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

３８字×３５行

別紙２

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※第　　号	氏　名	川端　香
試験担当者	主査　名古屋大学教授　千島　亮 印 名古屋大学教授　辛島　千恵子 印 名古屋大学教授　寶珠山　稔 印		

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 半側空間無視（USN）の社会復帰への阻害要因と臨床介入の現状ついて
2. 介入に用いた作業療法課題と統計学的解釈の妥当性について
3. 本研究知見のリハビリテーション医療への応用可能性と課題について
4. 「意味のある作業」が重要視される背景と作業療法について
5. 本研究の介入デザインの特徴と課題
6. Awareness Scoreの改善の根拠について
7. 人間作業モデルと「意味のある作業」について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、リハビリテーション療法学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。